

向社会的行動の生起過程に関する探索的研究

植 村 里 絵¹⁾

問題と目的

満員電車で立っている老人に席をかわってあげたり、落ち込んでいる友達を励ましてあげることは、日常生活においてそれほどめずらしいことではない。このような行動は向社会的行動 (prosocial behavior) とよばれ、他者と円滑な対人関係を形成するのに重要な役割を果たしている。しかし、近年、日本の若者にはこのように他者を思いやる意識が低くなってきており、このことが急増する若者の社会問題をひきおこしている原因の1つであるといわれている (中里・松井, 1997)。そこで本研究では、現代の若者たちが日常場面で他者に対してどのような思いやり行動 (向社会的行動) をとっているのかを探るとともに、そのような行動が生起される過程についても検討する。

向社会的行動の定義は歴史的にも分野の違い (たとえば、発達心理学と社会心理学) によっても少し異なるが (松崎・浜崎, 1990)、本研究では向社会的行動を広義にとらえ、「援助行動や与与行動、他人を慰める行動といった他者に利益となるようなことを意図してなされる自発的な行動」とする。これには、具体的な報酬や社会的承認を目的とした行動、自分自身のマイナスの内的状態 (たとえば、助けを必要としている他者を見ることによって生じる罪障感や心痛) を低減することを目的としている行動、それに、他者への同情とか内面化された道徳的原則に従おうとする願望によって動機づけられた行動 (愛他行動) も含まれる (Eisenberg 著, 二宮・首藤・宗方 訳, 1995)。

向社会的行動は利己的なものから愛他的なものまでさまざまな動機によってひきおこされるが、そのなかでも共感 (empathy) は向社会的行動を動機づける要因の一つとして重要視されてきた (Eisenberg & Mussen, 1989)。しかしながら、共感の概念は不明確であるためにそれぞれの研究者が異なる感情反応を「共感」として

測定してしまい、共感に関する研究結果が一貫しないという問題がある (Lennon & Eisenberg, 1987)。そこで最近では、悲しみなどのネガティブ感情を表出している相手を見たときに喚起する感情反応を、不安感や不快感などの嫌悪感情を喚起する自己指向的感情反応と、相手に対する心配や同情を喚起する他者指向的感情反応に分類し、それぞれの感情反応の特徴や機能が調べられてきている。自己指向的な感情は個人的苦痛 (personal distress: Batson et al., 1987; Eisenberg & Strayer, 1987) とよばれ、他者指向的な感情は共感 (empathy: Batson et al., 1987)、同情 (sympathy: Eisenberg & Strayer, 1987; Wispe, 1986) あるいは共感的配慮 (empathic concern: Davis, 1983) などとよばれている。自己指向、他者指向それぞれの感情反応と向社会的行動の関係を調べた結果、どちらも向社会的行動を導くことは可能だが、その動機に違いがあることが分かってきた (Batson, 1987; Eisenberg et al., 1990, 1996)。まず、自己指向的な感情が喚起しているとき、人は自分の不快感情を低減するために相手を援助する。そのため、その場から逃げ出すことが容易な状況では向社会的行動は生起しにくくなる。一方、他者指向的感情では、人は相手の悲しみや苦痛を低減するために行動を起こすため、その場から逃げ出すことが容易かどうかは関係なく向社会的行動は生起するというのである。

何らかのネガティブ感情を表出している他者を見たときの感情反応が向社会的行動に影響を与えることは分かってきたが、上記のような感情と行動の関係が全ての対人状況において成立するとは限らない。日常の対人場面では、喚起する感情以外にもさまざまな要因が向社会的行動を促進したり抑制したりしている。例えば、人は好意感情を抱いている人が困っている場合は相手を助けてあげたい気持ちになるが、嫌いな人に対してはそのような気持ちになりにくい。好悪感情以外にも、相手との関係や他の人物の存在の有無などさまざまな要因が向社会的行動に影響を与えていると考えられている (Eisenberg

1) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生

向社会的行動の生起過程に関する探索的研究

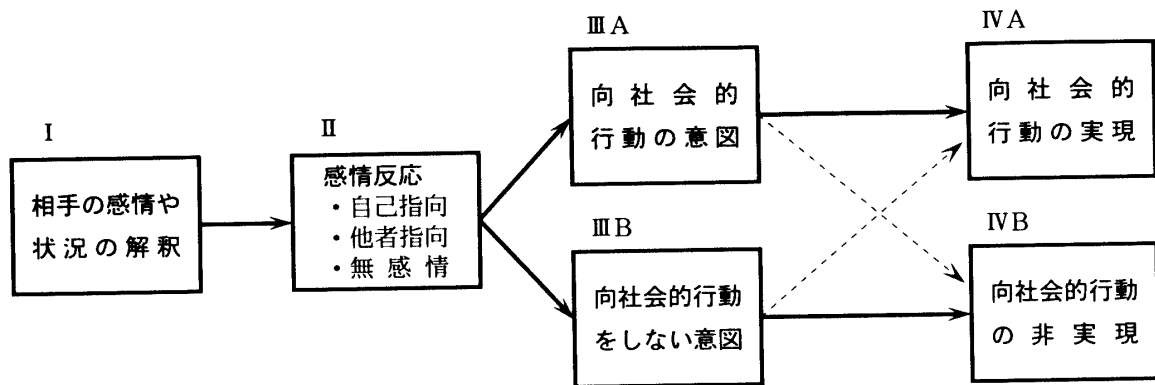


Figure 1 向社会的行動の生起過程

著, 二宮・首藤・宗方 訳, 1995; 原田, 1990; 森下・信濃, 1995; 高木, 1998)。また, 相手を助けてあげようという意図があったとしても実際には行動を起こさない場合や, 反対に, 助けてあげようという意図はなくても助けてあげる場合もある。従って, 向社会的行動の発生メカニズムを明らかにするためには, 向社会的行動の意図と行動は区別したうえで, それぞれの関係についても調べる必要がある。

向社会的行動に関する多くの先行研究により, 人がある困難に直面している他者と出会ってからその人を援助するという行動をとるまでの過程にはさまざまな段階(他者の感情や状況の認知→感情喚起→向社会的行動の意図形成→向社会的行動の実現など)があり, ある段階から次の段階に移行するまでにさまざまな要因が作用していることが明らかになってきた(それらの段階過程を非常に大まかに図式化してみると, Figure 1 のようになる)。このように, 向社会的行動の生起に重要な諸要因や, それぞれの要因間に関してはかなり解明されてきているが, 感情反応から向社会的行動の実行までの一連のプロセスが, 現実場面においてどのように作用しているのかについてはあまり検討されていない。

そこで本研究では, 大学生あるいは専門学校生に対して質問紙調査を行い, 「相手に何かしてあげたい」と思った状況と, 「何かしてあげたいとは思わなかった」状況をそれぞれ記述してもらおうと同時に, このときの対人感情や感情反応, 向社会的行動の実行の有無などについても回答してもらおうことにより, 向社会的行動がどのように生起されるのかを調べる。つまり, 「向社会的行動の意図」の段階(Figure 1 のⅢAとⅢB)を中心に, 感情反応(Ⅱ)や向社会的行動の実現の有無(ⅣA, B)について調べることにより, 向社会的行動の生起過程について探索的に調べることを目的とする。また, 被調査者から得られた回答から, 現代の日本の青年が他者に対

してどのような向社会的行動を行っているのかも検討する。

なお, 他者のネガティブ感情に対する感情反応は自己指向的な感情と他者指向的な感情に分類されているが, これらの感情を示す用語が研究者間で一致していないことを上述した。従って, 本研究では, ネガティブ感情(悲しみや苦痛など)を喚起している相手に対して不安, 嫌悪, 困惑, 恐怖などの不快感情を喚起している場合を「自己指向的感情」(self-oriented emotion)とし, 心配や同情など相手を配慮した感情が生じてくる場合を「他者指向的共感」(other-oriented empathy)とする。

方法

被調査者 T大学生178名, D大学生85名, K専門学校生55名に対して質問紙を配布した。後日回収した結果, T大学165名(男性68名, 女性97名), D大学70名(男性59名, 女性11名), K専門学校生39名(男性28名, 女性11名), 計274名から回答を得た(回収率86.7%)。しかし, 無記入のものも含まれていたため, 有効データ数は男性132名, 女性114名, 計246名(平均年齢=20.3歳, SD = 0.93)であった。

調査内容 被調査者が最近3ヶ月の間に実際に直面した状況について詳しく記述してもらった。状況には「相手の状況がよく理解でき, 何かしてあげたいと思った」状況(状況1)と「相手の状況を頭では理解できたけれど何かしてあげたいとは思わなかった」状況(状況2)の2種類があり, 各状況につき最大3つのエピソードを想起してもらった。

各状況の質問は以下のような内容であった。

- 1) 被調査者が出会った状況; どのような状況に相手が陥っていたのかを質問
- 2) 被調査者の感情; その状況を知ったときの被調査者の気持ちを質問

- 3) 向社会的行動の有無；相手に対して何かしてあげたかどうかを尋ねる質問に対して、「はい」と「いえ」で回答してもらった。
- 4) 向社会的行動の具体的内容（質問3において「はい」と回答した場合のみ）；相手に対してどのようなことをしてあげたか質問
- 5) 向社会的行動を行った、あるいは行わなかった理由（促進動機、抑制動機）
- 6) 1) の状況に陥っている相手との関係；「友達・知り合い・恋人・配偶者・親・兄弟（姉妹）・初対面・その他」のいずれかを選択してもらった。
- 7) 1) の状況に陥っている相手との親密度；植村（1999）の対人関係の親密度を測定するための項目群（「その人とこれまでどのくらい話したことがありますか」「その人とプライベートに食事をしたり、飲みに行ったりしたことがどのくらいありますか」「その人の好きなもの嫌いなものをどのくらい知っていますか」「その人の家や家族の事をどのくらい知っていますか」「その人が興味を持っていることをどのくらい知っていますか」）を使用。全5項目について、「ない」から「たくさん」の5段階評定で回答を求めた。
- 8) 1) の状況に陥っている相手に対する好意度；「嫌い」「どちらかといえば嫌い」「どちらでもない」「どちらかといえば好き」「好き」の5段階評定で回答を求めた。

調査時期 1999年6月-7月

調査手続き 各被験校において、調査用紙は講義終了後に被調査者に配布された。エピソードの想起に要する時間に個人差があること、身近な人の存在がエピソードの記述に影響を与えることなどが予想されたため、調査用紙は各自持ちかえってもらい、1~2週間後の講義終了後に回収した。

分類方法 各質問項目に対する被調査者の回答を以下のように分類した。

<被調査者が出会った状況>；被調査者から得られた606のエピソード（状況1-372、状況2-233）を筆者と大学院生とで繰り返し整理し、相手が「人生上の問題（進路、人間関係、仕事など）で悩んでいた」「社会的資源が不足していたため困難に直面していた（子ども、老人、身体障害者、事故などで手足が不自由な人を含む）」「予測不能な事態（事故や盗難にあう、お金が足りない、などが含まれる）に困っていた」「身体の調子が悪かった」「勝負ごとで負けていた」「その他」の6つに分類した。

<被調査者の感情反応>；何らかの状況に陥っている相

手に対する被調査者の感情反応は、「自己指向的感情；不安感、嫌悪感、困惑などの不快感情が喚起しており、喚起された感情はどちらかという自分自身に向かっている」、「他者指向的共感；同情や心配などの他者を配慮する感情が喚起しており、喚起感情は相手に向かっている」「非感情的反応；何も感じなかった場合や相手あるいは相手の陥っている状況に対する評価や判断を述べる場合」の3つに分類した。

<向社会的行動の具体的内容>；高木（1998）と原田（1990）の分類を参考にして、8カテゴリーに分類した。つまり、「寄付・奉仕行動」；他者にお金を寄付したり、血液や臓器などを提供する、「分与・貸付行動」；自分の貴重な持ち物（お金など）を分け与えたり、貸し与える、「緊急事態における救助行動」；緊急で重大な事態に陥っている他者を救助するために、危険を覚悟で、直接、あるいは間接にその事態に介入する（乱暴されている人を助けたり、警察に連絡するなど）、「労力を必要とする援助行動」；身体的努力を提供して、それを必要としている他者を助ける（車が故障している人を助けるなど）、「社会的資源が不足している人に対する援助行動」；身体の不自由な人、お年寄り、幼少児に対して援助の手を差し伸べる（席をゆずる、荷物をもってあげる、荷物を一緒に拾ってあげるなど）、「小さな親切行動」；出費のことをほとんど気にかけることなく、ちょっとした思いやり親切心から人助けをする（道を教えてあげる、傘を貸してあげる、自分の車の前に車をいれてあげるなど）、「気遣い・いたわり行動」；相手の様子を気遣う、身体の調子を心配してあげる、「助言・忠告行動」；相談に乗る、アドバイスしてあげる、の8つに分類。

<向社会的行動の促進動機>；向社会的行動をとった理由については、森下・信濃（1995）と高木（1998）を参考にした上で、彼らの分類に当てはまらないものは筆者自身でカテゴリーを作成し、最終的に10カテゴリーに分類した。すなわち、「愛他心」；純粹に相手のことを思いやり、助けてあげたいという欲求に基づいたもので、愛他心に根ざしている（「その人の苦しみを少しでも少なくしてあげたかったから」など）、「道徳観」；社会生活を営む上で個人が守るべき行為基準に従おうとするもの（「人として当然なことだから」など）、「親密さ」；心理的距離の近いことが動機になっている（「友達だから」、「知っている人だから」など）、「共感」；相手の苦痛や困難な状態を認知し関心を示し、相手と同じような情動を経験している（「かわいそうだから」など）、「無意識」；行為の目的や動機を意識しないで援助する（「なんとなく」、「無意識に」など）、「相手の好ましい人格特徴および行為者のよき感情状態」；相手が助けてあげたいほどの

感じのよい人である場合や、行為者の気分がよい場合（「相手がいい人だったから」、「そのとき気分がよかったから」など）、「援助拒否の困難さ」；相手から直接頼まれるなどして立場上断ることが難しい場合や援助を行わないと自分や他の人に迷惑がかかってしまう場合（「たのまれたから」、「放っておくとみんなに迷惑だから」など）、「援助の自信」；自分の行動により相手が助かることを知っている、あるいは自分の行動に自信を持っている（「こうすれば相手は喜ぶことを知っていたから」など）、「被援助のよき経験：行為者自身が以前に援助されてありがたかった（「自分も同じようなことをしてもらってうれしかったことがあるから」など）、「その他」の10 類型である。

<向社会的行動の抑制動機>；促進動機と同様に類型化し、12カテゴリーに分類した。すなわち、「配慮」；相手の立場や気持ちに配慮したり、相手のことを思いやっている（「その人にとって助けることは良くないから」など）、「余裕なさ」；行動を起こすだけの体力や気力に欠け自分の心に余裕がないあるいは時間的余裕がない（「疲れているから」、「急いでいたから」など）、「自信なさ」；援助するだけの能力が自分にはないという不安がある（「何をしたらいいのか分からなかったから」、「タイミングを失ったから」など）、「相手への嫌悪感」；相手を嫌い不快に思う（「相手が嫌いだから」など）、「疎遠」；相手との心的距離が遠い（「あまり親しくないから」、「知らない人だから」など）、「援助責任の分散」；自分以外にも人がいること、あるいは誰かが援助をはじめていることで、援助責任が分散してしまっている（「他の人が援助していたから」、「他にも人がいたから」など）、「問題の軽視」；相手が直面している問題が深刻であると感じられない（「何もしてあげなくても、すぐに解決すると思ったから」など）、「自我関与の低さ」；相手が悩んでいる問題が自分には関係のないことと感じられる（「本人同士の問題だから」、「自分には関係ないから」など）、「援助の好ましくない経験」；以前に援助したが何の問題も解決することができなかった（「前にアドバイスしたのに、言うことを聞かなかったから」など）、「自業自得：援助を求める原因がその人にあるため（「自分

が悪いんだからしょうがない」など）、「援助に伴う被害；援助することによって行為者が被害をこうむる危険性がある（「一度助けたら、なんども助けを求めてくるから」など）、「その他」の12カテゴリーである。

<相手との関係>；相手との関係は、「友人」「知り合い」「恋人」「家族」「初対面」「サークルやバイト仲間」「社会的資源が不足している人（子ども、老人、身体障害者、事故などで手足が不自由な人）」「その他」に分類した。

結 果

1. 各要因と向社会的行動の意図との関係

まず、「相手に何かしてあげようと思った状況」（状況1）と「何かしてあげようとは思わなかった状況」（状況2）で相手に対する感情反応や向社会的行動の実現あるいはその動機などに違いが見られるかどうか検討した。

1) 相手が陥っていた状況 相手が陥っていた状況によって向社会的行動の意図形成に違いがみられるのか調べるために、直面状況を、「人生上の問題で悩んでいた」「社会的資源が不足していたため困難に直面していた」「予測不能な事態に困っていた」「身体的な調子が悪かった」「勝負ごとで負けていた」「その他」に分類し、 χ^2 を用いてエピソード数の偏りを調べた（Table 1 参照）。ただし、5未満の期待値が20%以上あったため、カテゴリー6を除いて検定を行った。その結果、エピソードの出現頻度の偏りは有意であり（ $\chi^2(4) = 30.95, p < .01$ ）、残差分析の結果、「社会的資源が不足していたため困難に直面していた」が状況1では多いが、状況2では少ないことが明らかになった。

また、被調査者が日頃どのような向社会的場面を経験しているのかを検討するために、状況1と状況2のエピソード数を合わせて分析した結果、エピソードの出現頻度には偏りが見られた（ $\chi^2(5) = 930.2, p < .01$ ）。残差分析から、相手が「人生上の問題（進路、人間関係、仕事など）で悩んでいた」あるいは「予測不能な事態に困っていた」状況に出会うことが特に多いことが分かった。

2) 援助対象者の特徴 ここでは、相手が自分にとっ

Table 1 相手が直面していた状況

| | 人生上の問題 | 社会的資源不足 | 予測不能事態 | 身体的に調子悪い | 勝負で負ける | その他 | 合計 |
|-----|--------|---------|--------|----------|--------|-----|-----|
| 状況1 | 200 | 43 | 100 | 5 | 21 | 3 | 372 |
| 状況2 | 154 | 3 | 63 | 7 | 4 | 2 | 233 |
| 合計 | 354 | 46 | 163 | 12 | 25 | 5 | |

Table 2 相手との関係

| | 友人 | 知合い | 恋人 | 家族 | 初対面 | サークル やバイト 仲間 | 社会的 資源の不足 している人 | その他 | 合計 |
|------|-----|-----|----|----|-----|--------------------|-----------------------|-----|-----|
| 状況 1 | 187 | 19 | 22 | 17 | 55 | 21 | 38 | 13 | 372 |
| 状況 2 | 108 | 34 | 9 | 9 | 41 | 17 | 3 | 12 | 233 |
| 合計 | 295 | 53 | 31 | 26 | 96 | 38 | 41 | 25 | |

てどういう人なのかということが、向社会的行動の意図形成にどのような影響を与えるのか探る。

〈相手との関係〉 相手との関係によって向社会的行動の意図が異なるのかを検討するため、援助対象者との関係を「友人」「知り合い」「恋人」「家族」「初対面」「サークルやバイト仲間」「社会的資源が不足している人」「その他」に分類した。 χ^2 検定を行った結果、エピソードの出現頻度には有意な偏りが見られたため ($\chi^2(7) = 35.64, p < .01$)、残差分析を行った。それにより、状況 1 では「社会的資源が不足している人」が、状況 2 では「知り合い」の出現頻度が多いことが明らかになった (Table 2 参照)。なお、状況ごとで検討した結果、どちらの状況においても偏りは有意であり (状況 1 - $\chi^2(7) = 513.63, p < .01$; 状況 2 - $\chi^2(7) = 285.63, p < .01$)、他のカテゴリーに比べて「友人」の出現頻度が著しく多いことが分かった。

〈相手との親密さ〉 次に、相手との親密さが向社会的行動の意図に与える影響について検討する。相手に対する親密さに関する質問項目 (5 項目) を因子分析 (主因子解) したところ、一因子性が確認された ($\alpha = .94$)。従って、全 5 項目を合計して項目数で割ったものを各エピソードの親密度得点として、状況 1 ($M = 2.8, SD = .137$) と状況 2 ($M = 2.5, SD = 1.26$) の平均親密度得点を比較した。その結果、状況 1 の平均得点の方が状況 2 よりも有意に高かった ($t(602) = 2.72, p < .01$)。従って、相手との親密度が高い場合の方が、向社会的行動の意図を形成しやすいといえる。

〈相手に対する好意感情〉 各エピソードにおける「相手に対する好意度」(1~5 点) を状況ごとに平均を算出し、それらの平均得点を比較した。その結果、状況 1 における得点 ($M = 4.00, SD = .92$) の方が状況 2 の得点 ($M = 3.3, SD = 1.22$) に比べて有意に高かった ($t(390) = 7.53, p < .01$)。これらの結果から、相手に対して好意感情を抱いている方が、「何かしてあげよう」という向社会的行動の意図を形成しやすいと予測される。

3) 相手に対する感情反応と向社会的行動の意図との

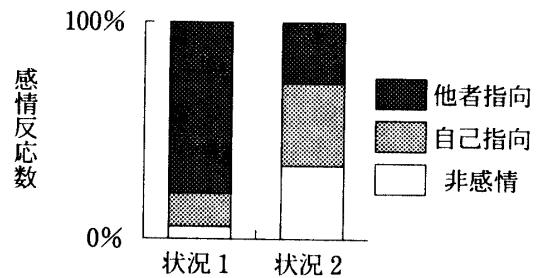


Figure 2 各状況における感情反応タイプ

Table 3 向社会的行動の実現

| | 行動あり | 行動なし | 合計 |
|------|------|------|-----|
| 状況 1 | 276 | 95 | 371 |
| 状況 2 | 36 | 197 | 233 |

関係 相手に対して喚起する感情が向社会的行動の意図形成にどのような影響を与えるのかを明らかにするために、被調査者の感情反応を、「非感情的反応」「自己指向的感情」「他者指向的共感」の 3 つに分類した。 2×3 の χ^2 検定の結果、エピソード数の偏りは有意であった ($\chi^2(2) = 156.1, p < .01$)。そこで、残差分析を行うと、状況 1 では他者指向的共感が他の 2 つの感情反応タイプと比べて多く、反対に、状況 2 では非感情的反応と自己指向的感情が他者指向的共感と比べて多かった (Figure 2 参照)。従って、相手に対してどのような感情が喚起するかは、その人を援助しようという意図に影響を与えるといえる。

4) 向社会的行動の実現への影響 相手に対して「何かしてあげよう」という意図は実際の援助行動を導くのかどうかを調べるために、向社会的行動の有無を尋ねる質問 (「その人にたいして何かしてあげましたか」) に対して、「はい」と回答した場合は「行動あり」に、「いいえ」の場合は「行動なし」に分類した (Table 3 参照)。 2×2 の χ^2 検定を行った結果、状況の違いにより行動実践の有無に有意な差が見られることが分かった ($\chi^2(1) = 199.11, p < .01$)。つまり、状況 1 では「援助あ

り」が、状況2では「援助なし」が有意に多いといえる。これらの結果から、「何かしてあげよう」という意図はその後の行動実現に強い影響を与えることが明らかになった。しかし、状況1で行動を実現しなかったケースもいくらか見られ(26%)、状況2でも援助行動を行うケースが少し見られた(15%)。

5) 向社会的行動の種類 状況によって、用いられる向社会的行動が異なるかどうかを検討する。そのため、実際に被調査者が行った向社会的行動を、「寄付・奉仕行動」「分与・貸付行動」「緊急事態における救助行動」「労力を必要とする援助行動」「社会的資源が不足している人に対する援助行動」「小さな親切行動」「気遣い・いたわり行動」「助言・忠告行動」の8つに分類し、各状況ごとに χ^2 検定を行った(Table 4)。その結果、両状況においてエピソードの出現頻度に有意な偏りが見られた(状況1 - $\chi^2(7) = 379.0, p < .01$; 状況2 - $\chi^2(5) = 46.4, p < .01$)。状況1, 2とも「助言・忠告行動」「小さな親切行動」が他の行動カテゴリーと比べて高かった。

6) 向社会的行動の促進動機 状況によって促進動機に違いがあるかどうかを調べるため、向社会的行動を行った理由を「愛他心」「道徳観」「親密さ」「共感」「無意識」「相手の好ましい人格特徴および行為者のよき感情状態」

「援助拒否の困難さ」「援助の自信」「援助のよき経験」「その他」の10カテゴリーに分類した(Table 5)。状況2では向社会的行動を行ったケースが少ないため、 χ^2 検定は実施できなかった。そこで、状況1のみで検定を行った結果、エピソード数の出現頻度に有意な偏りがみられた($\chi^2(9) = 262.2, p < .01$)。つまり、「相手を助けてあげよう」という意図がある場合(状況1)では「愛他心」が向社会的行動の動機となりやすく、続いて「親密さ」「共感」もその動機となりやすい。状況2に関しては、統計的な有意差を調べることはできなかったが、Table 5から「援助拒否の困難さ」が他のカテゴリーと比べて多いことが分かる。また、状況1と状況2のエピソード数を合わせて分析した結果、エピソードの出現頻度には偏りが見られ($\chi^2(9) = 245.56, p < .01$)、「愛他心」「共感」あるいは「親密さ」が特に多かった。

7) 向社会的行動の抑制動機 状況によって援助の抑制動機に違いがあるかどうかを調べるため、向社会的行動を行わなかった理由を「配慮」「余裕なさ」「自信なさ」「相手への嫌悪感」「疎遠」「援助責任の分散」「問題の軽視」「自我関与の低さ」「援助の好ましくない経験」「自業自得」「援助に伴う被害」「その他」に分類した(Table 6)。促進動機と同様に、状況1と状況2それぞれで χ^2 検定を行った。その結果、どちらの状況におい

Table 4 向社会行動の種類

| | 寄付・奉仕 | 分与・貸付 | 緊急事態 | 労力必要 | 社会的資源不足 | 小さな親切 | 気遣い・いたわり | 助言・忠告 | 合計 |
|-----|-------|-------|------|------|---------|-------|----------|-------|-----|
| 状況1 | 1 | 9 | 3 | 35 | 18 | 92 | 9 | 114 | 281 |
| 状況2 | 0 | 2 | 1 | 2 | 0 | 16 | 1 | 17 | 39 |
| 合計 | 1 | 11 | 4 | 37 | 18 | 108 | 10 | 131 | |

Table 5 向社会行動の促進動機

| | 愛他心 | 道徳観 | 親密さ | 共感 | 無意識 | 人格特徴、よき感情 | 拒否困難 | 援助の自信 | よき経験 | その他 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----------|------|-------|------|-----|-----|
| 状況1 | 85 | 11 | 57 | 58 | 10 | 12 | 16 | 16 | 7 | 3 | 275 |
| 状況2 | 4 | 0 | 5 | 5 | 3 | 2 | 13 | 2 | 0 | 2 | 36 |
| 合計 | 89 | 11 | 62 | 63 | 13 | 14 | 29 | 18 | 7 | 5 | |

Table 6 向社会行動の抑制動機

| | 配慮 | 余裕なさ | 自信なさ | 嫌悪感 | 疎遠 | 援助の責任分散 | 問題の軽視 | 自我関与の低さ | 好ましくない経験 | 自業自得 | 被害 | その他 | 合計 |
|-----|----|------|------|-----|----|---------|-------|---------|----------|------|----|-----|-----|
| 状況1 | 8 | 26 | 36 | 1 | 1 | 8 | 0 | 4 | 0 | 0 | 3 | 2 | 89 |
| 状況2 | 15 | 26 | 41 | 30 | 8 | 1 | 16 | 25 | 7 | 12 | 5 | 7 | 193 |
| 合計 | 23 | 52 | 77 | 31 | 9 | 9 | 16 | 29 | 7 | 12 | 8 | 9 | |

でもカテゴリー間で有意な差がみられた (状況1 - $\chi^2(8) = 126.5, p < .01$; 状況2 - $\chi^2(11) = 98.91, p < .01$)。状況1では、「自信のなさ」や「余裕のなさ」が、状況2では、「自信のなさ」や「相手への嫌悪感」が抑制動機となる頻度が高かった。また、ここでも状況1と状況2のエピソード数を合わせて分析した結果、エピソードの出現頻度には偏りが見られ ($\chi^2(11) = 216.72, p < .01$)、「余裕のなさ」と「自信のなさ」が他のカテゴリーに比べて特に多かった。

II. 相手への好意感情や親密度がさまざまな要因に与える影響

上記の結果から、相手に対する好意感情が高い場合、あるいは相手との関係が親密な場合の方が、「何かしてあげよう」という行動の意図を形成しやすいということが明らかとなったが、これらの要因は向社会的行動の意図だけでなく、向社会的行動の生起過程における他の段階にも影響を与えると考えられる。そこで、これらの好意感情と親密さが感情反応や、向社会的行動の実現などに与える影響を詳しく調べる。

1) 感情反応に与える影響 相手に対してどれほど好意を抱いているか、あるいは相手との関係がどのくらい親密であるかによって、相手に対して抱く感情も異なってくると考えられる。つまり、Figure 1のIからIIへ移行する過程において、好意感情と親密度が作用して喚起する感情反応に影響を与えていると予測されるのである。そこで、まず「非感情的反応」「自己指向的感情」「他者指向的共感」の3つの感情反応タイプにおける平均好意得点を比較した (非感情 - $M = 3.33$; 自己指向 - $M = 3.48$; 他者指向 - $M = 3.94$)。分散分析を行った結果、条件の効果が有意であった ($F(2,598) = 18.1, p < .01$)。LSD法を用いた多重比較によって3つの感情反応タイプの平均を比較したところ、「他者指向的共感 > 自己指向的感情 = 非感情的反応」の関係が見られた。このことから、相手に対して好意を抱いている方が「かわいそうだな」という他者指向の感情反応が生じやすいことが示唆された ($Mse = 1.15, 5\%$ 水準)。

同様に、各感情反応タイプにおける平均親密度得点を比較した (非感情 - 2.45; 自己指向 - 2.81; 他者指向 - 2.75)。分散分析の結果、条件の効果は有意傾向であった ($F(2,602) = 2.56, p < .10$)。したがって、相手との仲が親密であるかどうかは、その人に対して喚起する感情にそれほど強い影響を与えないといえる。

2) 向社会的行動の実現に与える影響 「相手を助けてあげよう」という意図を持った場合でも相手を助けなかったり、「助けてあげないでおこう」という意図を持っ

Table 7 状況および向社会的行動の有無における平均好意得点

| | 行動なし | 行動あり | 平均 |
|-----|------|------|------|
| 状況1 | 3.58 | 4.14 | 3.86 |
| 状況2 | 3.25 | 3.53 | 3.39 |
| 平均 | 3.42 | 3.84 | |

Table 8 状況および向社会的行動の有無における平均親密度得点

| | 行動なし | 行動あり | 平均 |
|-----|------|------|------|
| 状況1 | 2.01 | 3.10 | 2.56 |
| 状況2 | 2.48 | 2.97 | 2.64 |
| 平均 | 2.25 | 2.95 | |

ても助けてあげることがある (Figure 1のⅢA, BからⅣA, B)。このような場合に、好意感情や親密さがどのように作用しているのかを明らかにする。まず、平均好意得点を用いて、2 (状況) × 2 (行動の有無) の分散分析を行った結果、状況 ($F(1,597) = 66.23, p < .01$) と行動の有無の主効果 ($F(1,597) = 21.51, p < .01$) のみ有意であった。つまり、状況1の方が状況2よりも好意感情が高く、また、援助行動ありのほうが援助行動なしよりも好意感情が高いという傾向がみられた (Table 7 参照)。

同様に、平均親密度得点を用いて、2 (状況) × 2 (行動の有無) の分散分析を行った (Table 8 参照)。その結果、状況 ($F(1,599) = 7.83, p < .01$) および行動の有無の主効果 ($F(1,599) = 45.48, p < .01$)、状況と行動の有無の交互作用 ($F(1,599) = 7.75, p < .01$) が有意であった。各水準ごとに単純主効果を分析した結果、状況1においてのみ行動ありと行動なしの差は有意であった ($p < .01$)。つまり、相手との親密さは、「助けてあげよう」という意図を持っている人が実際に行動を起こす場合に作用する要因であるといえる。

III. 相手との関係 (顔見知りか初対面か) を考慮した分析

ここまでは相手との関係を考慮せずに要因間の関係を分析してきたが、相手が顔見知りであるときと初対面であるときでは、向社会的行動の生起過程に違いがあるように思われる。初対面の場合は相手と親密な関係は全く形成されておらず、好意感情が向社会的行動の形成に強く作用するのかが疑問である。そこで、相手との関係分類において「友人」「知り合い」「恋人」「家族」「サークルやバイト仲間」カテゴリーに分類されたものを「顔見

知り」に、「初対面」と「社会的資源が不足している人(初対面のみ)」を「初対面」に分類し、この2群間に違いが見られることが予測される側面について検討した。なお、初対面群の親密度得点(1から5点)の平均が1.00であったため、親密度に関する両群間の検討は行わなかった。

1) 向社会的行動の意図形成に与える好意感情の影響

相手との関係によって好意感情が向社会的行動の意図に与える影響がどのように異なるのか検討するために、平均好意感情得点を用いて2(状況)×2(関係)の分散分析を行った(Table 9参照)。その結果、状況($F(1,573) = 64.706, p < .01$)および関係($F(1,573) = 157.3, p < .01$)の主効果、関係と状況の交互作用($F(1,573) = 4.84, p < .05$)が有意であった。各水準ごとに単純主効果を分析した結果、状況1でも2でも初対面群よりも顔見知り群のほうが好意感情が高いこと(いずれも $p < .01$)、顔見知り群においては状況1のほうが状況2よりも好意感情得点が高い($p < .01$)が、初対面群ではその差は見られなかった。これらの結果から、好意感情は相手が顔見知りの場合には「相手を助けてあげよう」という意図の形成を促進するが、相手が初対面

の相手であればあまり作用しないといえる。

2) 感情反応に与える好意感情の影響 相手に対して好意を抱いている方が他者指向的共感が生じやすいという結果が得られたが、このことは相手が初対面であっても当てはまるのであろうか。そこで、相手との関係を考慮して、3つの感情反応タイプにおける平均好意得点を比較した(Table 10参照)。3(感情)×2(関係)の分散分析を行った結果、感情($F(2,570) = 4.47, p < .05$)および関係($F(1,570) = 151.2, p < .01$)の主効果、感情と関係の交互作用($F(2,570) = 4.47, p < .05$)が有意であった。LSD法を用いた多重比較によって3つの感情反応タイプの平均を比較したところ、顔見知り群の場合は「他者指向的共感>自己指向的感情=非感情的反応」の関係が見られたが、初対面群の場合は、「他者指向的共感=非感情的反応>自己指向的感情」の関係が見られた($Mse = 0.91, 5\%$ 水準)。このことから、相手が知り合いである場合は、相手に対して好意を抱いている方が他者指向的な感情が生じやすいが、初対面の場合は、好意感情が低いと不快感情を伴う自己指向的感情反応が生じやすいと考えられる。

これらの結果から、全体的に好意得点の低い初対面群に対しては他者指向的共感が喚起されにくく、向社会的行動の意図が形成されにくいのかもしれないという疑問が生じてくる。そこで、状況1と状況2における顔見知り群と初対面群の出現頻度の偏りを検討するために、2×2の χ^2 検定を行ったところ、エピソード数の偏りは有意でなかった($\chi^2(1) = 2.73, p > .10$)。従って、相手が顔見知りの場合は、好意感情が他者指向的共感を喚起させるのに重要な影響を与えているが、初対面の場合は、その他の要因が他者指向的共感の喚起を促進させ、向社会的行動の意図を形成すると考えられる。

3) 向社会的行動の促進動機と抑制動機 次に、相手との関係が異なることによって、向社会的行動を行なった理由と行わなかった理由に違いが見られるか調べる。まず、相手との関係の違いによる向社会的行動の促進動機10カテゴリーの偏りを χ^2 検定を用いて検討した。しかしながら、5以下期待値が20%を越えたため、顔見知り群と初対面群を別々に検定した。その結果、顔見知り

Table 9 状況および相手との関係性における平均好意得点

| | 顔見知り | 初対面 | 平均 |
|-----|------|------|------|
| 状況1 | 4.32 | 3.03 | 3.68 |
| 状況2 | 3.47 | 2.60 | 3.04 |
| 平均 | 3.90 | 2.82 | |

Table 10 感情反応タイプおよび相手との関係性における平均好意得点

| | 顔見知り | 初対面 | 平均 |
|------|------|------|------|
| 非感情 | 3.45 | 2.90 | 3.18 |
| 自己指向 | 3.73 | 2.23 | 2.98 |
| 他者指向 | 4.26 | 3.05 | 3.66 |
| 平均 | 3.81 | 2.73 | |

Table 11 相手との関係性による向社会的行動の促進動機の違い

| | 愛他心 | 道徳観 | 親密さ | 共感 | 無意識 | 人格特徴、よき感情 | 拒否困難 | 援助の自信 | よき経験 | その他 | 合計 |
|------|-----|-----|-----|----|-----|-----------|------|-------|------|-----|-----|
| 顔見知り | 70 | 4 | 61 | 46 | 9 | 10 | 25 | 16 | 6 | 5 | 252 |
| 初対面 | 14 | 6 | 0 | 16 | 3 | 3 | 2 | 2 | 1 | 0 | 47 |

Table 12 相手との関係性による向社会的行動の抑制動機の違い

| | 配慮 | 余裕 なさ | 自信 なさ | 嫌悪感 | 疎遠 | 援助 責任の 分散 | 問題の 軽視 | 自我 関与の 低さ | 好まし くない 経験 | 自業 自得 | 被害 | その他 | 合計 |
|------|----|----------|----------|-----|----|-----------------|-----------|-----------------|------------------|----------|----|-----|-----|
| 顔見知り | 19 | 24 | 46 | 23 | 4 | 1 | 12 | 27 | 7 | 11 | 6 | 2 | 182 |
| 初対面 | 3 | 28 | 27 | 5 | 4 | 8 | 3 | 1 | 0 | 1 | 2 | 7 | 89 |

群、初対面群の両群においてエピソード数の出現頻度に有意な偏りがみられた（それぞれ、 $\chi^2(9) = 219.27, p < .01$; $\chi^2(7) = 40.66, p < .01$ ）。Table 11 に見られるように、顔見知り群では、「愛他心」の出現頻度が高く、続いて「親密さ」「共感」が高かった。一方、初対面群では「共感」と「愛他心」が他のカテゴリーと比べて出現頻度が高かった。

抑制動機の場合も同様に、抑制動機12カテゴリーの出現頻度の偏りを調べた。その結果、顔見知り群、初対面群の両群においてエピソード数の出現頻度に有意な偏りがみられた（それぞれ、 $\chi^2(11) = 126.70, p < .01$; $\chi^2(7) = 120.00, p < .01$ ）。顔見知り群では、「自信のなさ」「本人同士の問題」「余裕のなさ」「嫌悪感」の出現頻度が高く、初対面群では「余裕のなさ」と「自信のなさ」が他のカテゴリーと比べて出現頻度が高かった（Table 12 参照）。

これらの結果から、両群において促進動機や抑制動機に大きな違いは見られないが、促進動機の「親密さ」や抑制動機の「嫌悪感」は、相手のことをある程度知っている場合に作用する動機であるので、顔見知り群でのみ出現頻度が高かったといえる。

考 察

ここでは、現代の若者が日常場面において他者に対してどのように向社会的行動を行っているのかを検討するとともに、向社会的行動がどのような過程を経て生起しているのかについても論じる。

I. 現代の若者が体験している向社会的行動場面

被調査者（大学生および専門学生）が日常よく直面している援助場面をもとに、現代の若者の向社会的行動について検討する。被調査者が「ここ3ヶ月の間」に直面した援助状況は、「相手が人生上の問題（進路、人間関係、仕事など）で悩んでいた」状況が圧倒的に多く、続いて「相手が予測不能な事態に困っていた（事故や盗難に合う、急に雨に降られる、お金が足りないなど）」状況が多かった。困難状況に陥っていた相手では「友人」の割合が非常に高かったことや、実施した向社会的行動

の具体的内容は「助言や忠告」が非常に多かったことなどを考慮すると、今の若者の援助行動は友人に対してなされることが多いといえる。しかし、今の若者に限らず、青年期では対人関係の中でも友人関係が非常に重要な位置を占めるといわれている。従って、今回得られた結果は、「親密な友人関係を形成する」という青年の発達の特徴を反映している可能性がある。

また、向社会的行動を行った理由を状況1と状況2を合わせて分析した結果、「愛他心」「共感」「親密さ」の出現頻度が高かった。「相手を何とかして助けてあげたいから」という「愛他心」や「かわいそうだから」という「共感」の出現頻度が高かったことは、これらが向社会的行動を動機づけるのに重要な役割を果たしているとしている先行研究の主張（e.g., Eisenberg & Mussen, 1989; Hoffman, 1981）を確かめるものである。ただ、「友達だから、知り合いだから」という「親密さ」が向社会的行動の動機となっているケースがわりと多かったことは興味深い。現代の若者の思いやり意識を国際比較した結果、どこの国の若者でも他人よりも知人に対する方が援助的であるが、アメリカやトルコの若者と比べて日本や中国や韓国の若者は知人よりも他人に対して特に非援助的である結果が得られたという（中里・松井, 1997）。今の日本の若者には、「親しい人には援助を行い、そうでない人にはあまり援助を起こさない」という傾向が強く見られるのかもしれない。

同様に、向社会的行動をとらなかった理由を状況1と状況2を合わせて分析した結果、「忙しいから、疲れていたから」という「余裕のなさ」と「何をしたらいいか分からなかったから、自分には無理だから」という「自信のなさ」の出現数が他のカテゴリーと比べて圧倒的に多かった。これらの結果から、今の若者が精神的にも時間的にもゆとりがない生活を送っており、他者をいたわる余裕がないことが推測できる。また、幼い頃から他者に対して援助する機会を多く持ってきた子どもは向社会的であるといわれている（Eisenberg 著, 二宮・首藤・宗方 訳, 1995）。今の子どもたちは他者と希薄な人間関係しか持てないという見解（中里・松井, 1997）を考慮すると、今の若者は幼い頃から他者に対する援助行動

の経験が少ないために、相手が援助を必要としていることが分かっているにもかかわらず援助の仕方が分からないのかもしれない。

II. 向社会的行動の生起過程

相手が陥っていた状況と相手との関係が向社会的行動の意図形成に及ぼす影響 相手がどのような状況に陥っていたのか、あるいは、相手がどういう人であるのかということが向社会的行動の意図形成にどのような影響を与えるのか調べた。その結果、老人や子ども、あるいは身体が不自由な人が困っている状況に出会った場合には、多くの人が「助けてあげたい」という気持ちになることが示唆された。人は相手が困難状況に陥った原因を内的に帰属する（「自業自得だ」）よりも、外的に帰属する方が援助を行いやすいという（高木，1998）。おそらく、人は社会的資源が不足している人が困難状況に陥っているのを見ると、その人の統制を越えたところにその原因があると思うためにより援助的になると考えられる。

相手に対する感情反応と向社会的行動の意図との関係 何らかの困難状況に陥っている他者を見たときに喚起する感情は、「相手を助けよう」という意図の形成に影響を与えていた。つまり、「かわいそうだな」とか「大丈夫だろうか」という他者を配慮した感情が喚起する場合には向社会的行動の意図を持ちやすく、非無感情の反応や「困ったな」「どうしよう」という不快感情が喚起する場合は向社会的行動の意図は形成されにくいことが明らかになった。本文の結果では示していないが、自己指向的感情が喚起しているときに向社会的行動を行った場合と、他者指向的共感が喚起しているときに行った場合とで向社会的行動の促進動機が異なるのかどうかを調べた。その結果、自己指向では、「援助拒否の困難さ」が他のカテゴリーより多かった（「愛他心；7」「道徳観；2」「親密さ；9」「共感；12」「無意識；2」「相手の好ましい人格特徴および行為者のよき感情状態；2」「援助拒否の困難さ；18」「援助の自信；2」「援助のよき経験；2」「その他；4」； $\chi^2(9) = 45.67, p < .01$ ）。一方、他者指向においては、「愛他心」「親密さ」「共感」が多かった（「愛他心；82」「道徳観；8」「親密さ；49」「共感；43」「無意識；7」「相手の好ましい人格特徴および行為者のよき感情状態；7」「援助拒否の困難さ；8」「援助の自信；11」「援助のよき経験；5」「その他；2」； $\chi^2(9) = 289.26, p < .01$ ）。これらの結果を考慮すると、先行研究で述べられているように（e.g., Batson, 1987）、他者指向的な感情は愛他的な動機によって向社会的行動を導くといえる。一方、自己指向的な感情が喚起しているときには、人は相手を助けようとはし

ないが、援助を拒否することが難しい状況では相手を助けると予測される。このように、向社会的行動を実現したとしても、自己指向的な感情が喚起しているか他者指向的な感情が喚起しているかでその行動の動機には大きな違いがあるという主張（Batson, 1987; Eisenberg et al., 1990, 1996）が本研究においても支持されたといえる。

向社会的行動の意図と行動の実現との関係 予想通り、相手を助けてあげようという向社会的行動の意図を形成した場合ほとんどの人が相手を援助してあげ、向社会的行動の意図を形成しなかった場合は行動を起こさないことが多かった。しかしながら、助けようと思いつつも実際には援助行動を行わないケースや、助けようと思っていなくても援助を行うケースもいくらか見られた。状況1と状況2の向社会的行動の促進動機と抑制動機には違いが見られ、状況1では「愛他心」「共感」などの促進動機や「自信のなさ」「余裕のなさ」などの抑制動機の割合が高く、状況2では「援助拒否の困難さ」という促進動機と「自信のなさ」「相手への嫌悪感」という抑制動機が高かった。これらの結果から、人は相手を助けたいと思いつつも、助ける自信がない場合や精神的身体的に助ける余裕がない場合は援助を起こせなくなってしまうのだと予測できる。また、援助しようと思いつつも、援助を拒否することが難しい場面では相手を助けると考えられる。

相手に対する好意感情と親密さが向社会的行動の生起過程に与える影響 相手が好きな人か嫌いな人か、あるいは親しい人か親しくない人かということは、感情反応や向社会的行動の意図およびその実現に大きな影響を与えていた。相手に対する好意感情や親密さが高い方が向社会的行動の意図を形成しやすいことが明らかになったが、好意感情は前段階の感情反応にも影響を与えていた。つまり、人は好意を抱いている相手に対しては相手を思いやる気持ちを伴う他者指向的共感を喚起しやすいという結果が得られたのである。また、人は、「助けよう」という意図を持っていても、好意や親密さが高くない相手に対しては援助行動を実現しにくいことがわかった。本研究では特に好意感情が向社会的行動の生起過程において強く作用していることが示唆されたが、これは好意感情を抱いている相手に対する方が向社会的行動の意図形成や行動の実現が促進されるという先行研究の主張（Regan, 1971; 齊藤, 1985）を支持している。親密さも好意感情ほどではないが向社会的行動の生起過程に強く影響を与え、この2つの要因の各段階に対する作用の仕方はよく似ていた。このことは、この2つがよく似た概念（相関は $r = .60$ ($p < .01$) であった）である

Table 13 「状況」×「相手との関係性」のクロス集計表

| | 顔見知り | 初対面 |
|------|-----------|---------|
| 状況 1 | 266 (218) | 93 (46) |
| 状況 2 | 177 (33) | 44 (0) |

() 内の数字は実際に向社会的行動を行ったケース数を示している

ため、向社会的行動の生起過程に対する影響もよく似た傾向を示したと考えられる。

相手との関係（顔見知りか初対面か）が向社会的行動の生起過程に及ぼす影響 本研究で得られたエピソードの援助対象者は、ほとんどが顔見知り（約70%）であり、中でも友人の占める割合が非常に高かった。そこで、先述したような向社会的行動の生起過程が初対面の人に対する場合にでも同じように当てはまるかどうか検討した。その結果、好意感情は、相手が顔見知りの場合は他者指向的共感の喚起や向社会的行動の意図形成を促進するが、初対面の場合は促進しなかった。また、結果には示さなかったが、Table 13に見られるように、相手が見知らぬ人である場合は向社会的行動の意図を形成しても行動を実現するケースが約半分しかないことが明らかになった。このことは、先に論じた「好意感情や親密さが低い相手に対しては向社会的行動を実行しにくい」という結果とつながる。初対面の相手に対する向社会的行動の抑制要因が「余裕のなさ」と「自信のなさ」に集中していることから、忙しい日常生活を送っていると見知らぬ他者に対して何かをしてあげる心の余裕ができないのかもしれない（この2つの抑制動機は相手が顔見知りの場合も強く作用しているが）。

このように、相手が顔見知りか初対面であるかでの向社会的行動の生起過程においていくらか違いが見られた。従って、このような行動が生起するメカニズムを詳しく解明していくためには、行動対象が行為者にとってどういう人なのかということを考慮する必要があるといえる。

まとめと問題点 本研究の結果から、相手の陥っている状況を知ってから向社会的行動が生起する道筋にはいくつかのルートが存在することが明らかになった。＜相手に対して他者指向的共感が喚起→「助けてあげよう」という意図が形成→愛他的な動機づけによる向社会的行動の実現＞というルートが理想的であると思われるが、実際にはさまざまな要因の働きによって向社会的行動は促進されたり、抑制されたりしている。このような複雑な向社会的行動の生起過程を日常的な対人場面から探ったことは意味あることであると思われる。しかしな

がら、Eisenberg (1986) の「向社会的行動のモデル」で示されているように、本研究で扱った要因以外にも向社会的行動を促進したり抑制したりする要因はたくさん存在している。また、本研究では個人差を無視して分析および討論しているが、資質的な共感には個人差があり「愛他的性格」が高い人はより援助的であるとされているし (Eisenberg, et.al, 1989), ある状況を見て相手が援助を必要としていると気づく段階でも個人差があると思われる。従って、今後は個人差も含めて向社会的行動の生起過程について考えていかなければならない。さらに、本研究では被調査者に3ヶ月以内に起こった状況を想起してもらったが、この方法では調査用紙に記入する段階で被調査者が過去のできごとをストーリー立ててしまっている可能性があるため、方法論的な問題点も改善していく必要がある。

引用文献

- Batson, C. D. 1987 Prosocial motivation: Is it ever truly altruistic? In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 20. New York: Academic Press. Pp. 65-122.
- Batson, C. D., Fultz, J., & Schoenrade, P. A. 1987 Distress and empathy: Two qualitatively distinct vicarious emotions with different motivational consequences. *Journal of Personality*, 55, 19-39.
- Davis, M. H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Eisenberg, N. 1986 *Altruistic emotion, cognition, and behavior*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- アイゼンバーグ, N. 二宮克巳・首藤敏元・宗方比佐子 (訳) 1995 思いやりのある子どもたち一向社会的行動の発達心理— 北大路書房 (Eisenberg, N. 1992 *The caring child*. New York: Harvard University Press.)
- Eisenberg, N., & Fabes, R. A. 1990 Empathy: Conceptualization, assessment, and relation to prosocial behavior. *Motivation and Emotion*, 14, 131-149.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Murphy, B., Karbon,

- M., Smith, M., & Maszk, P. 1996 The relation of children's dispositional empathy-related responding to their emotionality, regulation, and social functioning. *Developmental Psychology*, 32, 195-209.
- Eisenberg, N., Miller, P. A., Schaller, M., Fabes, R. A., Fultz, J., Shell, R., & Shea, C. L. 1989 The role of sympathy and altruistic personality traits in helping: A reexamination. *Journal of Personality*, 57, 41-67.
- Eisenberg, N., & Mussen, P. H. 1989 *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eisenberg, N., & Strayer, J. 1987 Critical issues in the study of empathy. In N. Eisenberg & Strayer, J. (Eds.), *Empathy and its development*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 3-13.
- 原田純治 1990 援助動機と動機・性格との関連 実験社会心理学研究, 30, 109-121.
- Hoffman, M. 1981 Is altruism a part of human nature? *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 121-137.
- Lennon, R., & Eisenberg, N. 1987 Gender and age differences in empathy and sympathy. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.), *Empathy and its development*. New York: Cambridge University Press. Pp. 195-217.
- 森下正康・信濃淑子 1995 向社会的行動の動機因子に関する研究 和歌山大学教育学部紀要(教育科学), 45, 29-44.
- 松崎 学・浜崎隆司 1990 向社会的行動研究の動向—内的プロセスを中心にして— 心理学研究, 61, 193-210.
- 中里至正・松井洋 1997 異質な日本の若者たち—世界中の高生の思いやり意識— ブレーン出版
- Regan, D. 1971 Effect of a favor and liking on compliance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 627-639.
- 斉藤 勇 1985 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究, 56, 221-228.
- 高木 修 1998 セレクション社会心理学—7 人を助ける心—援助行動の社会心理学— サイエンス社
- 植村善太郎 1999 集団が新規参入者を受容する過程—高校・大学の事例— 名古屋社会心理学研究の配布資料
- Wispé, L. 1986 The distinction between sympathy and empathy: To call forth a concept, a word is needed. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 314-321.

(1999年9月16日 受稿)

ABSTRACT

An Exploring Study of the Process of Performing Prosocial Behavior

Rie UEMURA

The purposes of this study were a) to explore prosocial behavior in Japanese adolescents, and b) to examine the process of performing prosocial behavior, with a questionnaire to 243 students in college and vocational school (132 males and 114 females, M age=20.3). Participants were asked to describe some episodes in two kinds of situations, that is, 1) situations in which they had an intention to assist another person in distress or trouble, 2) situations in which they had no intention to assist another one in distress or trouble, though they could understand his (or her) situation well. Participants also answered some questions about their emotional state to another in trouble, the performance of prosocial behavior, and so on. The results suggested that today's adolescents enacted more often prosocial behavior to others whom they had known, compared to strangers. Furthermore, it was indicated that evoking "other-oriented empathy" (feeling of sorrow and concern for another), an interpersonal affect, and an intimacy were important mediators of prosocial behavior.

Key words: prosocial behavior, empathic emotion, adolescents, self-oriented and other-oriented emotion, interpersonal affect.